



石川 孝重

# INTERVIEW 03

「あ、人間が中にいるんだな」

## —まず今回挙げて頂いたプロジェクト (08-11P参照) のお話をお聞かせ下さい

私は、早期教育をかなり重視してるんですね。子供のころから安全、安心という観念は自分で持っていなきゃならない。特に私の専門は地震防災だから、まずは自助が基本だ、という見地に立っているんです。そうすると自助をやるために一番重要なことが私は「意識」だと思っていて、自分の身は自分で守るという意識をちゃんと持ってもらうこと。

例えば、今から三年くらい前に最初の相談があって、地震が起きたことを想定したサバイバル体験型のイベントというものの企画に関わりました。NPO「I love つづき」の人達が中心となって、事前に色んなレクチャーもして親御さんも含めて大学の体育館に泊まるんですね。地震が起きたという想定だから、ご飯なんかも普通のご飯を食べるんじゃなくて、防災的にアルミホイルで包んで火で炊いて。他にも、子供たちに町歩きなんかもさせて、そうすると子供たちが自分達でMAPを作ったりするので、あったこと、やったこと、新しく発見されたこと、みたいなのをパワーポイントを使ってプレゼンテーションしてもらおう。シンポジウムとかパネル展示とか成果発表をして、最後に我々がプレゼンターで認定証を渡して表彰してあげるの。そんなふうにごんごん活性化しています。親御さんもそういう生き生きとした子供たちの姿を見てるから、親御さん向けのメッセージ、お父さんお母さんを巻き込んだ形での連携ができてるのかなと思ってのわけですね。

## —他にも教育事業で力を入れていることはありますか

東京都の教育庁指導部で小中高校生の防災の総合科目や、特別授業のメニュー開発もし

ています。先生全員にリーフレットを配ったりモデル校を作ってそこで研究事業をやったりとかね。今ホームルームやなんかでも一声かけて、地震とか起こるかもしれないので、みなさん意識してくださいね、と。その心はどれも共通していて、子供の頃から、自分の身は自分で守るということを植えつけていくことですね。実は防災はその「一声」が、日ごろから意識を持たしていくという意味で一番大事なんですけど。これから先、今の小学生達が耐震補強をもうちょっと真剣に考えてくれるのではないかと、そういうことを期待しているわけなんです。

## —大学と地域の関わりとしてはどのような活動をされているのでしょうか

本学を拠点とした災害対策の提案を行っています。仮に災害が起きたら、大学生は女性といえども、活躍できるでしょう。地域の人達と協調して、いざという時には助け合いましょうと。非常時に動くものは平時にも活動してないと急にはできないので、平時からのつながりもここでは研究対象にしています。「非常時にはそのことを活かした上でつながります」という提案をしてるんですね。その平時と非常時の活動拠点として、ボランティアセンターをつくらう、ということも私もこの一年働きかけてきています。今ははまだ構成段階ですけど、この4月から9月(2008年)にかけては、具体的な地域貢献になってくるんじゃないかと思えますね。

## —では工学的な研究で、社会と関わりが深いものはありますか

学会でそれなりに注目されているものとしては、人間の感覚を判断基準にした建物の揺れ性状。例えば風が吹いたときに高層建物は

## ■ PROFILE

1951年東京都生まれ、蟹座  
1976年 東京理科大学工学部第一部建築学科卒業  
同大学院理工学部研究科博士課程建築学専攻終了  
工学博士の学位授与  
1984年 日本女子大学専任講師・助教授を経て1996年に教授  
1995年 University of British Columbia(CANADA)客員助教授  
1998年 生涯学習総合センター開設準備室室長を経て同所長  
2006年 学園活動評価・戦略室室長(評議員)



石川研究室で作成された防災をテーマにした絵本やかるた

揺れるわけだけど、それをどれくらいまで抑さえなければならぬのか、っていう人間しか判断できないことを、女子大の実験室には振動台があるからそこで、皆さんに乗ってもらって、アンケートに答えてもらったりしてるんですよ。みんなにきてもらって、この揺れだと感じるか感じないか、或いは耐えられるか耐えられないか、不快か不快じゃないとか。これは社会貢献的にはすごく重要で最近では制振装置を入れるか入れないかで数千円から数万円くらい費用がかかっちゃう。大きくコストに影響してくるんですよ。最近では、その振動台にクライアントと設計者が一緒に乗って、これぐらいの揺れはまずいけれど、これくらいならいいとかを体験するわけです。揺れの判断はなかなか数字じゃわからないものです。設計者も数字で設計してるんですけど、それを実際の揺れで、これくらいならホテルだけいいとか、これくらいならやはり制振装置いれようとか、それが振動台と一緒に体験することで瞬時に決まります。

## —石川先生が日本女子大学に来て、何か変化したことはありましたか

私は工学部の建築出で、もちろん学会で構造の規準書や設計指針を設計者に向けて作ったりしていますが、構造の世界って一般の人からみたらなかなか難解ですし、建築の中でも説明性の意識が足りないと思うし、そこに住んでいる人達に建物を本当に理解してもらえないと、やっぱり質の高い建物にはならないだろうし。私がこの大学にきた当初は、器としての建築を意識してたのだけれど、住居学科の手引きの中に、「住まう立場で教育する」という一文があって、「あ、人間が中にいるんだな」と、言われれば当たり前のことなんだけど新鮮に感じたのね。研究テーマもそれまで私がやってきた解析とか、実験よ

りも関心が段々と「建築社会学」へ。『感性と論理』っていう論文とかの別刷集を毎年研究室で出しているけれど、感性っていうのは感覚や情緒とかの話で、論理はロジックだから固めな感じで。それを私は融合して一つの研究を推し進めていきたいと思いますよ、人生もそうしたほうがいいですよってことをその中に込めてるんですけど。意外とそれは新しい考え方のようで、ハードを作っていくだけでなくソフトでも、とか色々融合させていくことをかなり若いときから思ってたんですよ。私も色々模索しながらやり始めてそれなりの歳になったから、これまでの研究の方向性を束ねてみたら、結局やってることは「建築社会学」だな、と。

## —先生は授業で構造・力学を担当されていますが、専門は「建築社会学」だったんですね

どちらかというと構造屋という狭いイメージは私の中にもう無くて。それでさっき言った東京都なんかからもお声がかかって。いま社会が求めているものに大人しく従って、結果を出そうとしているわけです。社会のトレンドの中で、やっぱりやらなきゃいけないことで今やれてないことはすごく重要だから。社会ニーズってのは大事だと昔から思っていました。今は特にそういう時代だし、耐震技術の開発は今ではたくさんの方がやっているので、免震構造とか制振構造は年々進化していて、それを私がやってもいいんだけどね。やっぱり社会的にまだやれてない分野の底上げっていったら言い過ぎかもしれないけど、私としては、そこをかなり気にしてやってます。やりたいことや、伝えたいことがあるから、それを一生懸命広めたいし、聞いてほしい。私は実働部隊、ものを作って行くことが好きなの。本質的にはそういうことやりたくてしょうがないんです。